

ベトナムにおける「新」と「古」の保存・展示

サイモン・ジョン

はじめに

今回のベトナム訪問は、報告者にとって初めての訪問であった。ベトナムフィールドワークの主な目的は、獅子舞やオンディアの観察であったが、ベトナムの歴史についての調査も行った。特に報告者にとってベトナムは東南アジアの国々の中でも特別な存在である。それは自国であるオーストラリアがベトナム戦争に参加したことの「恥」と関係している。さらに個人的な意味では自分の伯母がベトナム人であり、ベトナム戦争後のベトナム移民が周囲に多く、その1世や2世の友人が何人もあることもあって、ベトナムとその文化に対しては複雑な気持ちがある。

報告者は、ベトナム戦争が終わった1975年の翌年に生まれた。当時は長年の反対運動によりオーストラリアがアメリカに連れてベトナム戦争に参加した事は「恥」だという風潮になっていたし、自分も戦争嫌いになった。だが、友人の父親たちが「国の防衛のため」だと思い戦ってくれたことも否定できない。彼らが戦場から帰国した時にオーストラリア国民に歓迎されなかったことは裏切りであると思う。プライベートのレベルでは、戦争のおかげでベトナムで働いていた伯父が伯母に出逢えたことは悪いことと思えない。さらにベトナムの移民が他の移民たちと一緒にメルボルンの環境を

変えてくれたおかげで、筆者が大好きな今のメルボルンが存在しているといえる。

オーストラリア人にとって、ベトナムほど複雑な感情を抱く国はないと言えよう。そして、オーストラリアが現在のイラクにおいてベトナムの失敗を繰り返そうとしていることは許せない。今こそオーストラリア人は、ベトナムの歴史を再考する必要があると思う。

ベトナムの歴史は複雑である。とくに近代の歴史は悲劇の重なりであるため、逆に古代から近世までの歴史はほとんど知られていないといえよう。最近経済的に安定を保つようになったベトナムは、植民地時代以前の歴史の価値を強調している。一週間の旅で主にベトナム中部と北部を見たが、その地域だけで世界文化遺産が3ヶ所もあり、このような国は滅多にないと思う。ベトナム中部の世界遺産に登録されている場所は次の通りである。

- * フエの建造物群 (1993年登録) 16世紀～20世紀の王宮と帝陵の遺跡
- * ホイアン (1999年登録) 15世紀～19世紀の国際貿易港
- * ミーソン聖域 (1999年登録) 4世紀～14世紀の古代チャンパ王国の聖なる遺跡

チャンパ王国は中国・インド及び周辺の国々から様々な影響を受け、独特な文化を發展させた。その偉大な文明が忘れ去られようとした頃にフランスによるベトナムの植民地化が始まる。フランス人による探検・開拓によって、チャンパは「再発見」された。その遺跡は未だにベトナム中部に残っており、一番代表的なものはミーソン聖域である。それらの遺跡の一部は、ダナンのチャム彫刻博物館でも観ることが出来る。博物館と現地で観るのとはまた異なる経験であるが、両者を観れば現代においてベトナムの古代がいかに重要視されているかがわかる。しかし同時に近代の悲劇も忘れ去らないよう、ベトナム戦争に関連する跡地についても、保存あるいは記念地化が進められている。保護のためには、お金も必要である。財政に余裕ができた頃から、ベトナムはこの保存費用を稼ぐため戦跡の観光化を進めてきた。代表的な例は、北緯17度線付近の非武装地帯のツアーである。このようにベトナムの「新」と「古」の歴史を忘れないため、跡地の保存・展示が推進されつつある。

1. DMZツアー

第一次インドシナ戦争終了後のベトナムの南北分裂により、北緯17度線付近では、わずか5kmの幅の非武装地帯（英語：De-Militarized Zone, 略してDMZ（ディーエムズイー））が第二次インドシナ戦争（ベトナム戦争）まで続いた。そこはベトナム戦争時には激しい戦場となり、もとの森林風景は破壊され、その景観は一変した。これは爆弾だけではなく、枯葉剤によって森が破壊

され、その跡地に成長の早い樹木を植えたためである。この地域は未だに農業が盛んではないため、現在観光により地域開発を進めようとしている。

フエからミニバスでベトナムの南北を走る国道一号線の高速道路を一時間ほど進み、まずドン・ハ（Dong Ha）という町に到着した。ドン・ハはベトナム戦争時代にアメリカの基地が設置された町であり、その基地が1968年のテト攻勢により攻撃されたことは有名である。そのため、この町はかつてはかなりの盛り場であったが、戦跡に最も近い場所であるため現在はツアーの出発地となっているだけの田舎町である。我々もドン・ハでツアーガイドと合流した。

40歳の若きガイドは、このツアーを主催する観光会社の取締役であり、ある意味では新ベトナムの代表者といえる。子供の頃は戦争のため避難キャンプで暮らしたという彼は、戦争の悲惨さを体験して成長したといえる。私たちを案内しているうちに、当時の苦しい思い出が甦ったように見えたときがあった。それは彼の口調に現れたが、これは芝居ではなかったと思う。

彼によると、意外なことにアメリカ人の参加者は少なく、オーストラリア人の参加者が一番多いという。ドイツ人を初め、ヨーロッパ諸国の人々もよく参加するという。ツアーの価格がかなり安いと思い、そのことを彼に聞いたところ、「そんなには儲からないが、農業よりは収入はいい」という答であった。ガイドの格好の良い外見からは、農民との差があきらかに見られた。ベトナムでは経済的に恵まれている方と言えよう。

しかし、彼自身も現在の生活を築くまではかなり努力したようである。

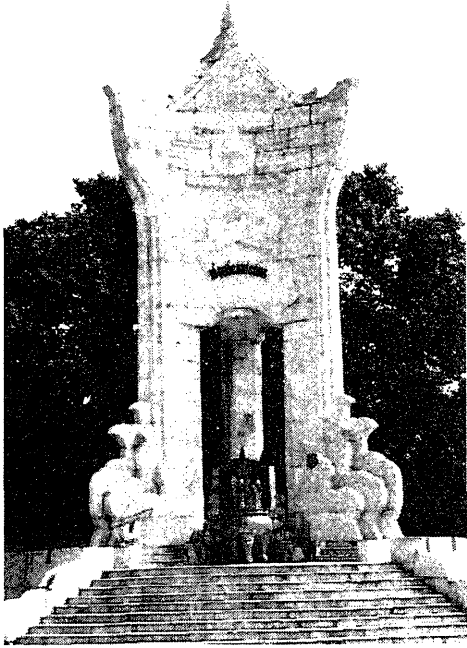
ツアーガイドと一緒にドン・ハから国道9号線で西の内陸部へ向かい、30分弱で右に曲がり、旧ホーチミン・ルートに入った。その道は新しく昔の雰囲気は全くなかったが、その呼称を聞くだけでも様々なイメージが湧いた。しかしすぐにまた右に曲がり、チューン・ソン (Truong Son) 国立墓地に到着した。ここでは想像力を必要としなくても、戦争の現実が目前にあった。バスから降り歩いて墓地に入ると、まず中央部にコンクリートの道があり、墓地の真中へ向かう階段がある。階段の左右に戦闘場面を描いた彫刻が見える。階段を上るとコンクリートの広場の中に三脚の記念塔が目立つ。この地に埋葬されているものの親戚は、まずその前に線香を供え、お参りをしてから、それぞれの向う墓へ進む。私たちもここでガイドの用意した花を捧げた。この記念塔のある面には、ホーチミン・ルートを作った人々へのベトナムの首脳からのメッセージが書いてある。他の面には「5. 59部隊」の歴史が書いてある。この部隊は1959年5月のホーチミンの誕生日に設立されたとされており、その目的は南への補給路を作り、かつ管理することであった。この墓地の土地は1972年から1975年までこの軍隊の基地として利用されていた。

この墓地には、記念塔を囲む墓が数万もあり、5つのゾーンに分かれている。これはそれぞれの犠牲者の出身地方を表し、この中もまた出身省別で分かれている。全ての墓石の上に「Liet Si」という文字が書いて

あり、これは殉教者という意味である。兵士の遺骨はそもそも戦場に埋もれていたが、統一後にこのチューン・ソンに移動された。遺骨が入っていない墓も少なくない一方、無名墓も多い。この無名墓の中には、後に遺族が戦死した自分の息子や兄弟たちの名前を自分たちで書き込んでいるものもある。ガイドによると、本当に彼らの親族の戦没者墓なのか、それとも単なる推測なのか、どうも曖昧のようである。来場者はここに眠る戦没者の親族や我々のような観光客だけではなく、戦没者の犠牲を記念すべきだと思う一般国民も多く来るそうである。ベトナムではベトナム戦争の犠牲にならなかったという人はほとんどいないであろう。ベトナムの中部にはチューン・ソンの他に戦没者専用の墓地は何ヶ所かあるが、チューン・ソンはこの地域最大の戦没者墓地である。

一号線に戻り、ドン・ハの22km北辺りを流れる旧国境線のベン・ハイ川 (Ben Hai River) に着いた。ベン・ハイ川上には日本の支援によって鉄筋の橋が架けられているが、その東側には狭い木材の橋がまだ残っている。しかし、この橋は建てられた当初の橋ではない。当初の橋は1967年にアメリカ軍の爆撃により破壊された。橋は二色で塗られており、中央から北の部分は赤のペンキで塗られ、南の部分は黄色のペンキで塗られている。1973年のパリ平和条約後、現在の橋の両脇の地に両国を代表する旗台が建てられた。まだ南北分裂中であったため、両国は旗の高さを競い合ったそうであるが、現在では北側の旗台だけに旗が翻り、南の

チューン・ソン国立墓地



中央記念塔



墓地の様子

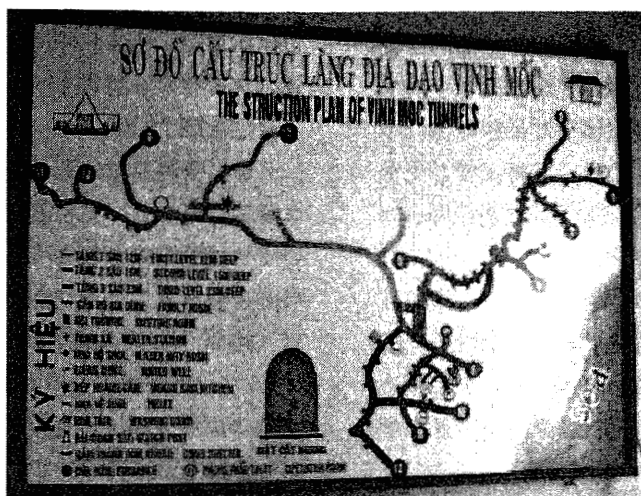


戦争の様子を表した彫刻



戦没者名が後に入れられた墓

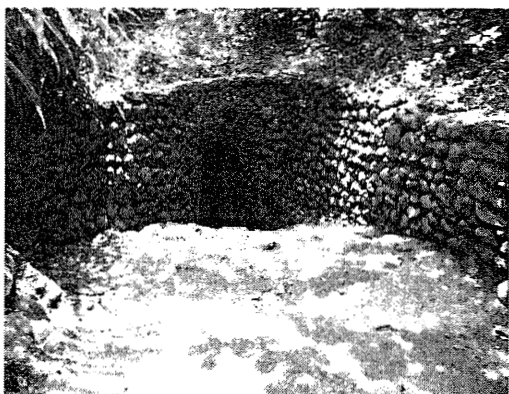
ヴァイン・モックのトンネル



トンネルの配置図



地下生活の再現



トンネルの入り口



出口のひとつから見た南シナ海

方には記念モニュメントのオブジェが旗の代わりに建てられている。北の旗台の下にある建物で南北ベトナム両国の交渉が行われた。その建物は当時のままに保存されている。橋の側の管理室は未だに利用されているようである。この橋の一角は新しくなっているが、深い歴史の意義を感じる。

橋より一号線を少し北へ走り右に曲がると狭い道に入り、その右側に川が見えた。しかし間もなく海岸に着き、最後の皇帝のバオ・ダイが夏休みを過ごした綺麗なツア・トゥン浜 (Cua Tung Beach) が見えてくる。この綺麗な海岸は周りの戦蹟とかなり対照的である。海岸に沿ってまた少し北へ行くとヴィン・モック (Vinh Moc) に至る。そこはDMZ以北で一番大きいトンネル基地が築かれた地である。

1966年からのアメリカの空襲を避けるために、一般の村民はトンネルを掘り始めた。後には、北ベトナム軍とベトコンも村民と一緒にトンネルを利用した。河口の北側に作られたヴィン・チュアン (Vinh Quang) のトンネルは弱くて空爆で破壊されたにもかかわらず、ヴィン・モックのトンネルは丈夫でいまだに残っている。爆弾は1個だけ入ったというが、跡の穴は後に空気入れとして使用したそうである。

奥の方には近年建てられた新しい資料館がある。資料館の説明は写真・地図などを使用しかなり詳しい。真中にある銅のレリーフには、ベトナム語と英語でハムレットの「生きるか死ぬか」の台詞が大げさに刻まれていてかなり目立つが、この悲劇にはこの文字は決して大げさではない。報告者

は南京虐殺の資料館やカンボジアのチュンエク (キリング・フィールド) にも行ったことがあるが、それらの地で感じたような被害のアピールを感じないことがヴィン・モックの魅力だと思った。

しかし資料館よりもトンネル自体が重要な展示物である。資料館で地下の生活について知識を得てからトンネルに入り、その生活に触れることもできる。トンネルは3層 (浅い・中くらいの深さ・深い) となっており、崖の12mから23mの下にある。ある部分は修復されており、またある部分は立ち入り禁止とされている。開いている部分には生活を再現するための人形が置かれている。ある家族が住む部屋や、攻撃の間に17人の赤ちゃんが生まれた助産室の展示が面白い。そして12の出入り口のうち、7つの出入口が海岸に接しているため、そこから綺麗な海を眺めることができる。当時の住民に海を眺める余裕があったかどうかは疑問に思うが、トンネルの生活と美しい海という対照的な風景を見て、よけいに見学者は戦争の重さを感じる。このような体験型の展示は非常に新鮮で、ヴィン・モック (Vinh Moc) はDMZツアーのハイライトであった。

2. ミーソン聖域

チャンパ王国 (192年～1832年) はベトナム中部を中心とした王国であった。ベトナムの北部は中国が支配していたが、中国の記録にはその南に「林邑 (リウー)」という国が存在したとあり、後の記録にはこれは「占城 (チャンパ)」と表記されるようになった。最初は中国の影響が強かったが、す

ぐにインドの強い影響を受けた。ミーソン遺跡にはこれが明確に見られる。遺跡にあったチャンパ碑文には、サンスクリット語の碑文から、サンスクリット文字でチャンパ語で書かれた碑文まであり、独自のチャンパ文化への変遷が見られる。

約1600年の歴史の中で、チャンパにもさまざまな変遷があった。さらに、ベトナムの少数民族であるチャム族がチャンパ人の子孫とされているので、ある意味ではチャンパの歴史は現在まで続いているといえよう。しかし、チャンパの歴史にはかなりの空白がある。ベトナムの中部に遺跡群が点在しているが、これはチャンパの首都がよく移ったためとされていた。しかし、近年、同時進行論が主論となり、各地域の遺跡群が古代ギリシャのような都市国家であり、チャンパは連邦であったという見方が強くなった。そのように考えると、ミーソン（美山）聖域がチャンパという全体の中でどのような位置づけになるのかはつかみにくいですが、偉大な場所であったことは過言ではない。

10月17日、ミーソン聖域を訪れた。ミーソンの聖域全体はA~Lの遺跡群に分かれている。全体の建築の雰囲気は似ているが、それぞれの遺跡群の遺蹟は多少異なっている。これは設立された時代にもかかわっている。まず入ったのはB群とC群であった。この敷地は最も広く、観光客も最も多い。保護作業が進んでいるためかどうかわからないが、最も元のままに残っている。しかも、来場者はストウツパの中に自由に入ることができる。壊れる恐れのあるものは博物館に移動されているが、まだ何点かの遺物がスト

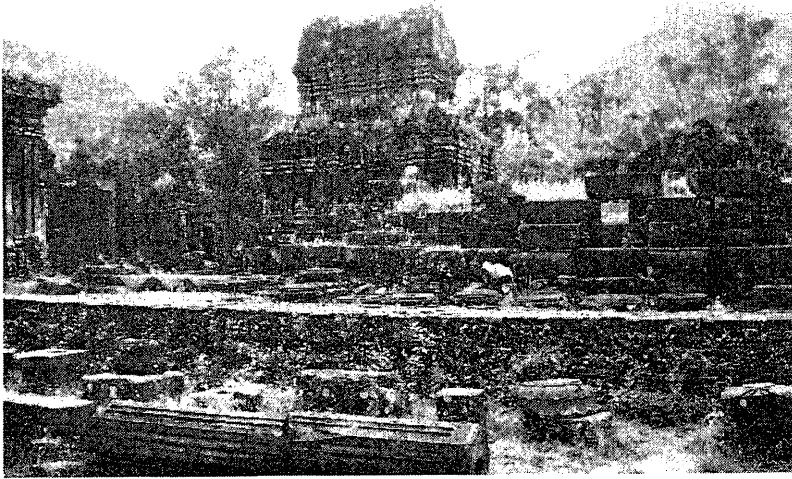
ウツパの中に残っている。山の中のH群を探しに行ったのであるが、はっきりした道がなく、すぐ諦めた。代わりにB・C群の裏のA群に行ったら、かなりオンボロであった。遺物が外に並べられており、ペンキで整理番号が塗ってあった。世界クラスの考古学者が扱っているはずであるが、遺物自体にペンキを塗るといふこの扱い方にはかなり驚かされた。そのA群にフエから来た30人程度の大学生のグループが入ってきた。外国人よりは国内の旅行者が多かった。この学生たちは一人の先生と共に自国の歴史を学んでいた。

ミーソンはユネスコなどの援助による国際的修復活動が進められている。イタリア・チームが作業を行っていたG群を見ることはできなかったが、最後に学生と一緒にドイツ・チームにより保護作業中であるE群を見た。これは最古の遺跡とされている。しかし、現代の国際的な保護活動が必ずしもこの古代の遺蹟にプラスに働いているとは限らない。チャンパが世界遺産となり、ユネスコ（国際連邦教育科学文化機関）の資金が入っている状況はよくわかる。ミーソン遺蹟の入場門付近には、巨大な展示館や新しい橋もできた。ヴィン・モックのト

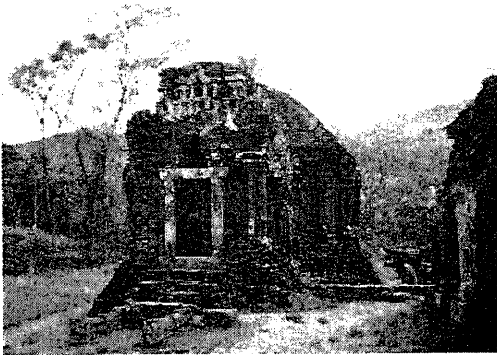


ミーソン遺跡の配置図（古い看板）

ミーソン聖域



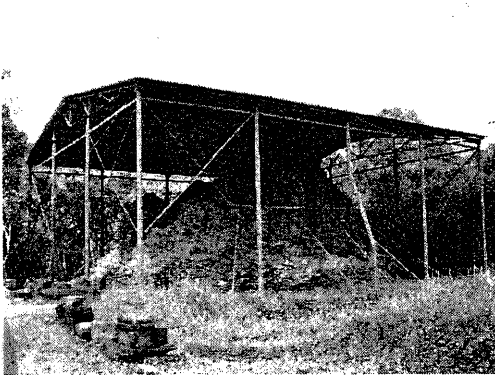
遺跡A群の一部



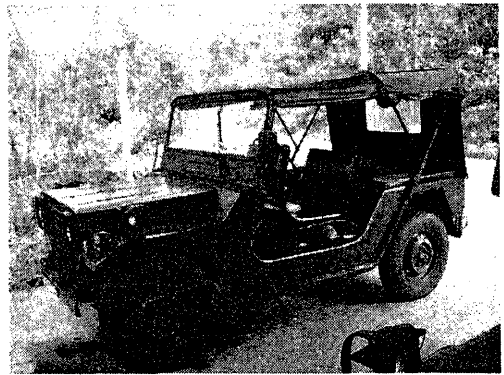
遺跡A群のストゥーバ



遺跡内部の彫刻とベトナム人観光客



保存作業中のストゥーバ



観光客を遺跡入り口まで連れて行くジープ

ンネルと同様、各国の言語が使用されている展示館はチャンパ遺蹟見学前の見学者の情報源となっている。また、橋から遺跡群の途中までの数百メートルを、無料の新しいジープが見学者を運んでくれる。このジープのサービスは無駄としか思えない。なぜなら、ジープ停留所から遺跡群までもかなり距離があるし、また、広い遺跡群の中の方が年配者にとってはかなりきつい行程なのである。

ユネスコのお金が入っていてもまだ管理の問題がある。立派な入場券の裏には遺蹟の地図が書いてあったが、この地図は遺跡群入口に建てられた古い看板の地図と異なる点が多かった。E群から来た道と違う煉瓦で舗装された小道がジャングルの中を通っていたが、この道は入場券の地図に載っていなかった。方向としては戻りたかった場所の方へ向かっていたように見えたため、この小道を進んでみた。子供のグループもついてきて本当に遺跡群の入口に帰れるかどうか心配だったが、かなり長い距離を歩いたあといつの間にかジープ停留所まで戻っていた。後で写真を見るとその道は出口となっていた。停留所からジープに乗り展示館まで戻り、雨が降り始めた時にマイクロバスに乗りホイアンへ戻った。ホイアンから「マーブル・マウンテン」という寺院群経由でダナンへと向かった。

3. ダナンチャム彫刻博物館

植民地時代にチャンパの遺蹟は再発見されるとともに、遺蹟から数多くの宝が持ち去られ、フランス人の庭などのオーナメントになっていた。1892年にシャルル・ルミー

ルが50個の像をツーレイン庭園に移し、後にカミーユ・パリ氏が荒塔を農園の中に見つけて、そこから彫刻類を保護のために持って帰っている。

博物館の存在は、倫理的問題を招くものである。植民地の場合では特に難しい。例えば、エジプトの遺蹟は大英博物館などに保護し保存すべきか、元の国に戻すべきかという問題には様々な意見があると思う。このチャム彫刻博物館の存在を聞いた時に、このような思いが浮かんだ。

ダナンチャム彫刻博物館は、遺蹟の保護を考えたフランス人たちにより遺物等を現地に残したまま保存すべく設立された。それゆえ1919年に博物館が正式に設立された時には、その運営に遺蹟保護のためのかなり厳しい条件が付けられた。

設立までの経緯は以下の通りである。

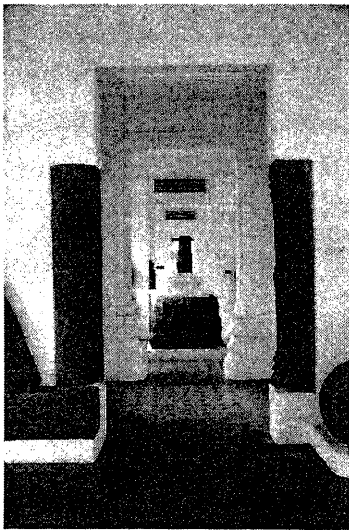
1902年にフランス政権はこれらの宝のハノイへの移動を命令したが、地方の有力者がこれを拒否する。1908年、フランスの考古学者アンリ・パルメンティエが後にこの博物館の設立理念となった条件を報告書に書いた。この報告書でパルメンティエは、サイゴン警察本部、ツーレイン（後ダナン）植民官邸などにおけるチャンパ遺蹟彫刻の散乱と放置を厳しく批判している。パルメンティエの条件は次の3つである。

- * 遺跡群から離れた場所に遺物が見つかった場合は、すぐに博物館へ移動すること
- * 遺跡群の中の遺物は悪化の恐れがなければ、そのままに残すこと
- * 旱魃を防ぐための農民等の遺物祀りを、

チャム彫刻博物館の展示方法



展示物が館内の壁や展示台に直接埋め込まれている。展示物の中には、それ自体が別の展示物を飾る台となっているものもある。



左：展示物の一部が戸口の両側に埋め込まれている。

右：博物館の庭に置かれ風雨にさらされた状態の展示物。

尊重すること

このようなパルメンティエの強い意志により、遺跡の現地の近くに博物館が設けられた。パルメンティエの条件は基本的に現在におけるユネスコの理念と離れておらず、当時としてはかなり進んだ価値観であると思う。これらの彫刻がこの博物館で展示されていることはパルメンティエのお陰である。1919年の時点で、この博物館には300の彫刻と70の碑が集まった。従来の博物館は単純な長方形であったが、所蔵している彫刻の数が増えたために両端にウイングが建てられ、1936年に拡大した博物館はアンリ・パルメンティエ博物館と改名された。

1946年に第1次インドシナ戦争が起きると、警備の手薄を狙って市民が略奪を行い、所蔵する多くの遺物が失われた。1948年までに少しずつ、売却先などから集め戻して所蔵を元の状況に回復していったが、フエのカイ・ディン博物館の所蔵はこの時期に全て消えてしまった。1963年にチャム彫刻博物館となり、現在の所蔵は約300点に及ぶ。1992年～1996年に修復作業が行われ、1996年に博物館の庭の発掘により157点の遺物が発見された。

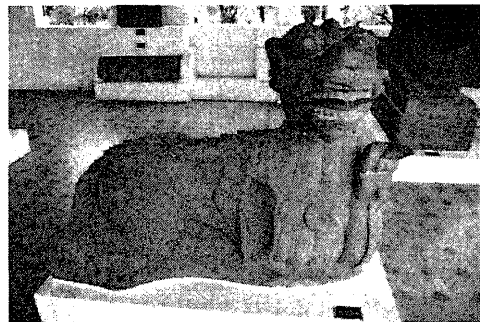
戦争を越えて、チャンパの遺跡群がまだ残されていることは奇跡的であると思う。テト攻勢のフエの戦いにより、南ベトナム軍の兵隊によって博物館を駐留に利用され、彫刻の間にハンモックを渡すなどの乱暴な扱いを受けている。チャンパ文明を研究する歴史家のフィリップ・スターンがニクソン大統領へ手紙を送り、ミーソンなどの遺跡の爆弾における破壊と博物館の安全面の不安について説明したところ、ようやく遺跡や遺物の保護を重視する命令が大統領から下ったのである。

しかしそのことよりも、10月17日、訪れた際、この博物館の最も魅力的な特徴として感じたのは、その展示方法である。各遺跡群にあった様々な遺物は、そのままに残すと悪化すると判断されているものについては博物館に移送されており、またこの中のほとんどは公開されていない。ここまでは他の博物館と異なりはないが、展示物に大きな違いが見られるのである。

一般の博物館で見る「触らないでください」、「撮影厳禁」などの指示がなく、観客が展示してあるものに直接手で触れても注意される様子はない。これらの展示物もレプリカではないのであるが、触れさせるこ



ダナンチャンパ彫刻博物館



触ることができる展示物

とが出来ないほど貴重であったり脆いものではないということだろう。しかも遺跡の柱が直接壁の中に埋め込まれており、壁自体が展示物となっているなどの展示方法も見られる。外庭に、彫刻が天候を恐れず設置してあることも珍しい。

博物館の警備員・学芸員の少なさは、日本では考え難いことだろう。けれども監視されず自由に彫刻などの歴史に直面することができる気楽な雰囲気は、伝統的な博物館に対する固いイメージからはるかに離れている。しかし残念なことに1980年代の後半に何点が盗難された。彫刻を展示するためには警備と自由のバランスを考えるべきである。

この展示方法に、反対する人は少なくなかろう。確かにかなり危険な扱い方であると思うが、慎重な運営さえ為されるなら、閲覧者にとって興味深い展示を継続することができる。ミーソンなどの遺跡群とチャム彫刻博物館の展示により、人々が消えたチャンパ文明の魅力に触れることを通して、アンコールなどのように多くの人々に知られるようになればと思う。

終わりに

20世紀のベトナムは、騒然たる歴史であった。植民地時代から第二次世界大戦、第一次インドシナ戦争、ベトナム戦争、中越戦争（第三次インドシナ戦争）、カンボジア出兵と悲劇が継続した。

ここ20年、ようやく安定を保つことも経済的な余裕も出来るようになり、ベトナムは自らの歴史を再考するようになった。「新」と「古」の歴史を記念する必要がベトナム

国民にも政府にも認知されてきた。DMZツアーは金銭が目当てだという観点もあり、これも否定できないが、それとともにベトナムの新しい歴史でみられる犠牲、悲劇、戦争のひどさを伝える展示も、戦争を直接に体験した人々とその子孫により重要視されつつある。ベトナムについては、ベトナム戦争などのイメージが強過ぎて、植民地時代以前の偉大な文明のような古い歴史はあまり知られていない。ミーソン聖域の世界遺産登録によりこの保存が推進されていることもあって、徐々に遺跡についての知識が世界に広まっている。保護作業のためには、博物館も重要である。チャム彫刻博物館の独特な展示方法には手緩い点もあるが、注意深く直接に遺物を触ってみれば、さらにその歴史の重要性がわかる。歴史は過去を描くものであるが、同時に現在や未来のための学問であり、ベトナムの独特な歴史を適切に保存し展示することはベトナム自体と世界全体のためになるに違いない。

参考文献

Emmanuel Guillon (編), Tom White (訳), 2001, Cham Art: Treasure from the Danang Museum, Vietnam, River Books, Bangkok

チャンパ王国の遺跡と文化展実行委員会 (編), 『チャンパ王国の遺跡と文化 (海のシルクロード)』, 財団法人トヨタ財団

Hyunh Thi Duoc, 2004, Cham Sculpture and Indian Mythology, Danang Publishing House, Danang

チャン・キイ・フォン／重枝豊, 1997『チャンパ遺跡一海に向かって立つー』